

一 本日は、「文語の苑」の、本年『明治大正文語五十撰』なる文語教科書を編纂せるに因み、該教科書に文語文を採録せる二人の作家、尾崎紅葉と泉鏡花師弟に就き、一席、拙き話を試みむ。本年は、明治三十六年、西暦一九〇三年に死没せる尾崎紅葉が、死去百十周年、明治六年、西暦一八七三年生れの泉鏡花が、生誕百四十周年に當る。

二 明治維新後、成立せる明治新政府、歐米の國に倣ひて、新しき國の體制確立を模索す。政府、軍にても、財政・經濟にても、又法制・學制等にありても、體制整備には、先づ歐米人「お雇ひ外人」の協力を得。同時に全國より俊才を集め、日本人材を養成す。斯く養成せられたる日本人材、日本の現實に適合せる體制を造出せり。

大學の制度整備、即ち東京の國立大學、現下の東京大學の創設、亦同様に行はる。文學部の英文學教授、ラフカディオ・ハーン、英國留學後歸朝せる夏目漱石に、職を譲りたる例の如し。

美術と音樂、亦同様なり。西歐的美術と西歐音樂、導入せられ、それに基づきたる美術教育・音樂教育の體制確立せらる。現在の「東京藝術大學」是なり。

大學と美術・音樂の西歐化・歐米化の風潮、文學にも波及す。

三 茲に文學と言ふは、ほぼ小説、戲曲、詩歌・俳句なり。その情況、明治初年に如何なりしやを一瞥せむ。文學は、「お雇ひ外人」の協力を得る能はざれば、近代化遲し。

第一に小説、戲曲、明治中期までは、江戸文學、ほぼ其の儘に繼續す。戲作の假名垣魯文、歌舞伎臺本は河竹默阿彌、明治時代前半は、此の二人の時代なり。魯文は、西洋旅行等新しき題材に挑み、默阿彌、散切(ざんぎ)り頭の人物を登場せしむる等新しき風俗を取入れるれど、内容は何れも、江戸時代の延長の如し。

第二に詩歌・俳句は、やや先立ち、明治十六年（一八八二年）頃より、新風兆す。詩は明治十六年に、『新體詩抄』發刊せらる。こは新體詩、即ち新しき體の詩の集成にて、基督教讚美歌を、牧師等、日本語五七調文語に譯したる事の影響、顯著なり。俳句にありては、正岡子規が改革運動、明治十七年（一八八三年）より始まる。

第三に小説には、政治に於ける自由民権運動に觸發せられ、政治小説なる小説、廣く讀まる。但しこは近代小説と様態を異にす。政治小説の全盛期は、明治十六年（一八八二年）より明治十九年（一八八六年）までなりき。

四 明治十八年、即ち一八八五年こそ、日本の近代文學が劃期的年なれ。この年、一つは『小説神髓』の發表、今一つは「硯友社」結成の、二つの重要事あり。

『小説神髓』は、坪内逍遙が氣鋭の文學評論なり。江戸時代の戯作と當時の政治小説に異なる、新しき文學を唱導す。逍遙、それが實例として、自ら『當世書生氣質』なる小説を書きて、世に問へど、こは未だ江戸戯作風の小説の域を出でず。

「硯友社」は、東京の大學豫備門、後の第一高等學校、今の東京大學教養學部の學生等の、結成せる文學團體にして、雑誌「我樂多（がらくた）文庫」を發刊せり。雑誌と云ふも、初めは、手書き草稿を紙綴（こよ）りもて編みたるものなりとぞ。「硯友社」、「我樂多文庫」が命名者にして、指導者たりしが、尾崎紅葉なり。

坪内逍遙の唱へたる新しき文學、二年後に發表せられたる最初の言文一致體小説、二葉亭四迷の『浮雲』、それが嚆矢と認めらる。のみならず此の頃より、日本近代文學の傑作とせらるる小説、左記年表の如く、續々と發表せらる。是、日本近代文學の黎明、即ち夜明けなるめり。

一八八五（明治十八）年 坪内逍遙『小説神髓』と『當世書生氣質』

大學豫備門*學生による「硯友社」結成、雑誌「我樂多文庫」發刊

*後の第一高等學校、今の東京大學教養學部

一八八七(明治二十)年 二葉亭四迷『浮雲』(最初の言文一致體小説↓「である」調)
山田美妙『武藏野』(最初の言文一致體新聞小説↓「です」調)

一八八九(明治二十二年) 尾崎紅葉『二人比丘尼色懺悔』、幸田露伴『風流佛』

一八九〇(明治二十三年) 森鷗外『舞姫』

一八九一(明治二十四)年 幸田露伴『五重塔』、齋藤緑雨『かくれんぼ』

一八九二(明治二十五年) 尾崎紅葉『三人妻』、森鷗外『即興詩人』

此の時代、代表的作家と目せられたるは、「紅露」、即ち尾崎紅葉と幸田露伴なり。或いは之に坪内逍遙と森鷗外を加へ、「紅露逍鷗」とも稱せらる。

尚言文一致、即ち口語にて文章を書かむとせる運動、先づ文學、特に小説より始む。文學の言文一致運動盛んなれど、其の頃、新聞の記事・論説は、文語にて書くが常例なり。

五 尾崎紅葉は、東京の未だ江戸と呼ばれし頃の芝、現在の濱松町、芝紅葉山の近在に生る。紅葉なる雅號、紅葉山に基づく。根附師なりし父は、同時に幫間、即ち「太鼓持ち」と呼ばれたる、花街にて客の取持ちをする職業の人なり。幫間は卑しき職業と見らるれば、紅葉、終生父の職業を恥ぢたりと云ふ。

紅葉、東京の府中學、即ち現下の日比谷高校に通ひ、同級生に幸田露伴あり。早熟の大秀才にして、中學より、十五歳にて大學豫備門に入學す。十七歳の時、「硯友社」結成と「我樂多文庫」發刊の指導者たり。「硯友社」に、今一人の早熟の秀才、山田美妙あり。美妙は紅葉の同志にして、「硯友社」の指導者格の作家なれど、「言文一致運動」に向ひたるにより、文語文に執著せる紅葉と訣別す。

六 尾崎紅葉と同年の人、但し嚴密には、西曆に非ずして、當時の日本の曆に基づく慶應三年生れの人、左記の如く、夏目漱石、幸田露伴、正岡子規、齋藤緑雨を數ふ。

西暦に據らば、紅葉は一九六八年一月生れにして、漱石等の一年下なり。

夏目漱石 一八六七年二月―一九一六年

幸田露伴 一八六七年八月―一九四七年

正岡子規 一八六七年十月―一九〇二年

尾崎紅葉 一八六八年一月―一九〇三年

齋藤緑雨 一八六八年一月―一九〇四年

山田美妙は、西暦にては紅葉と同年なるも、慶應四年、即ち明治元年に生る。

七 尾崎紅葉の年譜、左記の如し。二十一才にして流行作家となり、二十代前半にて、押しも押されもせぬ文壇の大家たり。三十五才にして世を去る。

一八八九年(二十一才) 『二人比丘尼色懺悔』(世に流行す)、讀賣新聞社入社

一八九〇年 帝國大學(國文科)退學

一八九一年 泉鏡花入門し、尾崎家の書生となる

一八九二年 『三人妻』(絢爛豪華なる文體の文語小説)

一八九六年 『多情多恨』(地味なる文體の言文一致體小説)

一八九七年(二十九才) 『金色夜叉』連載開始、大評判となる

以後療養と轉地の傍ら、斷續的に『金色夜叉』の連載を續く

一九〇三年(三十五才) 東京牛込(今の新宿區)の自宅にて胃癌に因り死去

八 尾崎紅葉は、日本近代文學最初の文豪なり。若く死去し、惜しまる。作家たる紅葉を總括せば、下記六點に纏めらるべし。

第一に、若き天才にして、文壇の大御所なり。

第二に、泉鏡花を始めとせる弟子等を可愛がり、親身に指導す。鏡花の外の弟子に、田山花袋、徳田秋聲等あり。

第三に、文章の推敲を重ね、文體に凝る。日本の近代小説、一九〇〇年頃以降言文一致體、即ち口語文によりて書くが主流となれば、口語文を嫌ひたる紅葉、その意味よりせば、時代に遅る。されど紅葉、亦、言文一致體の傑作小説『多情多恨』を書けり。

第四に、江戸文學を繼承す。特に井原西鶴より學ぶ。こは幸田露伴も同じなり。

第五に、紅葉の小説は、寫實を基本とせる社會小説なり。骨格大きく、廣き社會性、現實性あり。

第六に、虚構性を重視す。紅葉は自ら常々、小説は「想像にて書く」と言へり。『三人妻』『金色夜叉』の主人公等に、時にモデルの云々せらるるも、凡て紅葉の頭より出で、特定のモデル無きが事實ならむ。

最後の三點、殊に第五の社會性と第六の虚構性重視、其の後の日本の自然主義以後の、所謂「私小説」の主流となりし文學とは異なれり。蓋し紅葉の文學、寧ろ歐米の文學に近からむ。

九 尾崎紅葉が傑作として世評高きは、『三人妻』と『多情多恨』なり。『三人妻』は、徳田秋聲、谷崎潤一郎、舟橋聖一、之を高く評價す。絢爛たる文章の文語小説にして、「文語の苑」が『明治大正文語五十撰』には、『三人妻』の冒頭を採録す。成り金の金満家なる主人公をめぐる、本妻と二人の妾の性格描寫、卓拔なり。對照的なるは言文一致體小説の『多情多恨』にして、田山花袋之を絶賛す。妻を亡くせる男の妻戀ひの物語なれば、それにふさはしく、墨繪の如き淡彩の文體を用う。

十 尾崎紅葉最後の大作は、『金色夜叉』なり。『金色夜叉』廣く知らるれば、通俗的大衆小説と見らるること多し。先づ、小説の筋、米國の大衆小説よりヒントを得たり。紅葉は英語の達人にして、英語の小説を讀み漁り、そこより小説のヒントを得ること多かりしとぞ。又紅葉自身、常々、新聞小説は面白きが肝要なりと言へり。『金色夜叉』を紅葉、「どうせお芝居さ」と言ひ棄てたりとも傳ふ。但し紅葉は江戸つ子にして、照れと恥らひ強ければ、割引きする要あるべし。紅葉の弟子なるも、師とかなり考へを異にせる田山花袋、此の小説を、「絢爛な文章と結構の通俗的に面白い内容」と評せり。これら、『金色夜叉』を通俗小説視せしめたる因ならむ。

十一 然るに、田山花袋と同じき自然主義派の作家なれど、批評的的確さに定評ある正宗白鳥が見方、些か異なれり。『金色夜叉』を、「紅葉が自己の天分と蘊蓄とを傾注した小説：最も面倒な題材にぶつつかつて藝術的奮闘を試み：一代の才人が織つた錦繡の美：」と評し、未完ながら、紅葉の最高の傑作と見る。我、此の正宗白鳥が評言に共感す。

十二 『金色夜叉』の發端、新春正月三日の晩なり。東京山の手の邸宅に、大勢の若き男女ら集ひて、百人一首のカルタ取りに熱狂す。亂暴なる書生ら、着飾りたる若き娘らが中にありて、一際目立つは、柱蔭に慎しやかに坐するも、松の内なれば、着飾りて薄く化粧せる鳴澤宮なり(鏑木清方畫伯插繪)。

十三 此の邸宅に一人の紳士、人力車を驅つて訪ね來る。主人夫婦、鄭重に之を迎ふ。富山銀行が御曹司、富山唯繼なり。無名指に嵌むる指輪の巨大なるダイヤモンド、書生ら、娘らが驚嘆と疾視と噂の的となりつ。富山早速にカルタ取りに加はり、もみくちやにせらるるも、共に競技に加はりし宮を見染む。

十四 カルタ會終りて、客引揚ぐ。宮と共に歸り行きたるは、カルタ取りにては目立たざりし、

高等中學の制服を着せる學生、間貫一なり。貫一、若くして兩親を失ひし孤兒にして、亡父が生前恩を掛けたる宮が父親に引取られ、養育せらる。貫一と宮は幼時より、兄と妹の如く育てらる。宮が兩親、貫一の人物を見込み、ゆくゆくは宮の壻として、鳴澤家を繼がせむと思ふ。貫一亦宮を將來の妻と決め、鍾愛す。

十五 但し宮、大人となる過程に、自らが容色に自信を持ち始む。十七才の頃通學せる音樂學校の外國人教師より、附け文せられたる經驗、宮をして、漠然と將來の玉の輿を望む少女の夢を膨らましむ。貫一を兄と慕ひつつも、少女の夢を吹っ切る能はず。

十六 富山家より宮に、縁談の申し出來たる。兩親は宮が氣持を尋ぬれど、宮は明確に返答せず。兩親、宮は縁談を受くる意ならむと忖度す。宮に踏ん切りを附けしめんため、母親、宮を連れて熱海へ赴き、父親、貫一に、宮を諦むるよう慫慂す。

十七 貫一、宮が父親の言に承服し得ず。母親と同行せる宮を訪ね、熱海に赴く。熱海の梅園にて貫一、富山と同行せる宮と母親を見る。宮ら、約束して富山と會ひたるに非ず、富山は、たまたま訪ね來れるも、貫一さは思はず。

十八 これより、名高き、貫一お宮が熱海の海岸の場となる。三つの場面に分け、熊澤南水女史の朗讀を聽かむ。第一は、熱海の海岸の場景なり（熊澤南水女史朗讀、鏑木清方畫伯挿繪）。

貫一、宮と母親の熱海に來たるは、富山と逢ふためならむと責む。宮、そは邪推なりと否定、貫一尚詰問す。（熊澤南水女史朗讀、鏑木清方畫伯挿繪）

一たびは貫一、宮心變りせりとして落膽すれど、再び氣を取直し、宮の富山が財産に惹かれ、結婚せむとするのは、宮のためならずと説得す。然れども貫一が情理を盡したる説得、宮の

氣持を翻意せしめ得ず。(熊澤南水女史朗讀、鏑木清方畫伯插繪)

貫一、宮を蹴倒すも、宮の傷つきたるを見るや心配す。「これぞ紅葉なる」と泉鏡花は言ふ。いかに憎むとも、人の傷つかば氣に懸けざるを得ず。紅葉が筆、斯く動く。

十九 最後に宮、何を言はむとせるや。恐らくは、宮の富山と結婚せば、貫一のためともならむ、富山が財産、貫一の出世に役立たむとなるべし。されどそは、貫一の了解し得る所に非ず。貫一にとり、宮が結婚は凡ての終りなり。兄の如く貫一を見る宮に、そは理解し得ず。男女の氣持すれ違へり。

二十 茲に些かの脱線を許し給へ。詩人室生犀星、詩に

往昔(そのかみ)の娘ら 茶飲みになど誘へど

人妻に 何の語りひあるものぞ

と詠ふ。大方の女性讀者、此の詩を讀みて、「何故ぞ」と首を傾ぐ。男子には分るも、女性には理解し得ずと覺ゆ。女性は、結婚前も結婚後も、人格の變ずるに非ざれば、結婚後も、結婚前と同じく、親しき男性と附合ふに何の支障かあるべき、と思ふらむ。男性はさにあらず。結婚し、一家の主婦となれる女性に、他家の男、輕々に近附くべからず。當に遠慮あるべきなり。是、男女の氣持のすれ違ひならずや。

二十一 熱海海岸の場、斯く終れり。貫一、宮に言ひし如く、鴨澤の家には二度と戻らず。高利貸の家に住込み、情け無用の金貸し業務に勵む。「金色夜叉」とは、金の色に取憑かるる債鬼、即ち夜叉の事なり。貫一、さる者に成り果つ。

二十二 されど宮は、熱海の海岸にて、貫一が眞實の氣持に打たる。かるが故に少女の夢を脱し、大人の女の愛に目覺む。『金色夜叉』の一登場人物語るらく、女の愛は、少女の見惚れ、やや成長せる女の氣惚れより、成熟したる女の底惚れに進み、底惚れとならば一生續くと。宮は、貫一に底惚れせるなり。

富山家に嫁ぎても、貫一を忘るる能はず。際限なく手紙を書きては郵送す。貫一はそを讀みもせで、破り棄つ。夫の富山の氣遣ひ、宮には鬱陶しきのみ。宮と富山の夫婦關係惡化し、富山は外にて遊蕩するのみか、宮の居る家内へ藝者を連込むまでになれり。

二十三 明治三十二年一月、尾崎紅葉、病氣にて休載したる『金色夜叉』の連載を再開す。貫一、貸金の調査の必要より、栃木縣なる鹽原温泉に赴く。西那須野の鐵道驛に降り、鹽原へ向ふ途上の情景描寫、「抑々鹽原の地形たる、…」より始まり、名文を連ねて續く。そは、鹽原温泉が名を世に知らしめ、當時の教科書にも採録せらる。

二十四 其の頃の或る日、某所に園遊會の開催せられしに、紅葉出席したれば、名流夫人十數人、ばらばらと紅葉を取卷きつ。「先生、そもそも鹽原の地形たる、とは何事でせう」、「それどころやありませんわ」、「宮さんをどうして下さるんです」とて、紅葉に詰め寄つたりとぞ。紅葉家に歸り、弟子等に、「いや、驚かされたよ、しかし悪い氣はしなかつたよ」と語れり。そは、紅葉が言葉を聞きたる泉鏡花の、書く所なり。

二十五 『金色夜叉』の筋に戻る。季節外れの鹽原の、閑散たる温泉宿に止宿せる貫一、そこに來りし心中者の男女を救ふ。そが轉機となりて、貫一、夜叉より佛に換れり。蓄積せる財産もて、世の不幸なる人等を救ふ慈善家に轉向す。宮は夫の富山との冷き夫婦仲より、正氣を失ひて狂ひ、離婚せらる。貫一、狂へる宮を手元に引取り、大團圓となる。但しそは紅葉が腹案に過ぎず。筆の最後まで進まざるに、紅葉世を去りて、『金色夜叉』一卷は未完に了りぬ。